

巻 頭 言



情 報 処 理 と は

福 村 晃 夫†



本会の名前の“情報処理”は、information processing に対して作られた言葉であろう。このうちの information に“情報”をあてがうことについての先輩たちの議論は、昔側聞した。だが、processing に“処理”をあてたことのいきさつは寡聞にして知らない。

processing には加工という意味もある。情報の加工と言えぱなんとなくアクティブで、計算なる概念につなげて説明しやすいし、また素材の加工というアナログも得やすい。しかし、処理という言葉は、前処理、事後処理からゴミ処理に到るまで、いわば裏方的な使われ方をすることがしばしばある。ただし、これにはネガティブな意味合いはない。正月など長期にゴミ集めが停止すると、主婦ははたと困惑する。この種の処理は都庁、市役所にその使命の一半を与えるし、利権、資源を争う戦争の裏側、つまり平和時にはゴミ戦争がある。

H. A. Simon (認知科学者)の書きものの中に、知的システムは人間と自然の営みのきしみからできた何物かだという一文があった。使われていた比喻はひき臼で、その台の石は人間というハードウェア、回転部の石は自然というハードウェアである。このひき臼は何万年来動いているのであろう。環境から身を守り、自然をうまく利用する。そこには数々の知能の蓄積がある。これは、まさに比喩的ひき臼の所産だ、というのであろう。

だが、日常使われるひき臼の産物は、そのままでは単なる粉でしかない。その点では、自然の産物である石炭、油、シリコンなどと同じであろう。これらは、その価値がわからなければチリ、アクタ同様である。とすれば、人間の知的産物も、そのままではゴミ同様だということにならないか。

この意見には別の根拠もある。昨年、秋、関西で多数の木簡がみつかった。古代文化を知る貴重な資料だと騒がれた。新聞のとおりだとすれば、あの木簡は昔

の著述活動が出した反古なのだ。

そもそも古代文化を知ることとは、当時の人の頭と胃袋の中を知ることである。しかし、残念ながらそれは直接にはできないから、記録、遺跡のような知的、物的生活の名残り、いわば当時の生活のアカを探し回ることになる。考古学や文化人類学は、これらのゴミ処理学問だというのは言いすぎか。

さて、情報に対する科学、工学的アプローチの課題には communication, processing, storage の三つがあると心得ている。本会は processing の会だから情報の問題の3分の1を担うのかというと、ちかごろはそうでもない。もとはコンピュータ・ソフトウェア一点張りでその感が強かったのだが、コンピュータ・ネットワークができてからはそちらのソフトもカバーしている。storage も昔は OS の管轄下のことでよかったのだが、最近はデータベースばかりである。

それに、とくにいまは知識情報処理の時代であって、friendly interface などの掛声が聞かれる。この言葉の意味は、ユーザとの間の心ゆくまでの達意を実現することであろう。これは、まさに communication の問題である。また、知識の取得と表現が大事だが、これには情報をもつ深い意味を握した storage が欠かせない。これでは、processing だけでは仕事にならないではないか。はたして、いつまでも情報“処理”学会でよいのだろうか。

しかし、情報は知的生活の所産であり、そのまま放置すれば単なるゴミの堆積だという先刻の議論も傾聴に値しよう。ただの石コロもその意義、価値に気付けば金となり銀となる。それがきっかけで始まった自然科学の歴史は古い。知能の石コロもこれとまさに同様で、その価値に気付けば宝になる。だが、その科学も技術も始まったばかりだし、それに、素材はもともと生活のゴミだから、ここ当分は情報処理学会でよいであろう。

(昭和 61 年 1 月 16 日)

† 名古屋大学工学部情報工学科